

道化喜弥次 中か多

桑原水菜

Mizuna
Kuwabara





講談社文庫

中道かし多喜次弥

桑原水菜

講談社

著者 | 桑原水菜 千葉県生まれ、東京都在住。天秤座。中央大学文学部史学科卒業。1989年コバルト読者大賞を受賞してデビュー。代表作は『炎の蜃気楼』シリーズ。戦国時代から現代に連なる一大サーガを織りなし、本編だけで全40巻を数える。舞台となった場所には本シリーズを熱く支持する歴史好きの女性たちが多数訪れている。著書にはほかに『赤の神紋』シリーズ、『西原無量のレリック・ファイル』シリーズ、『箱根たんでむ 駕籠かきゼンワビ疾駆帖』などがある。

やじきたば どうちゆう
弥次喜多化かし道中

くわばらみずな
桑原水菜

© Mizuna Kuwabara 2014

2014年11月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277968-5

目次

第一話

「多摩の化け相撲」之卷

7

第二話

「保土ヶ谷宿にて御馬騒動に遭う」之卷

73

第三話

「小田原宿で鯉と観音に伺いを立てる」之卷

165

結尾

「けふは名にあふ箱根八里」

263





講談社文庫

中道かし多喜次弥

桑原水菜

講談社

目次

第一話

「多摩の化け相撲」之卷

7

第二話

「保土ヶ谷宿にて御馬騒動に遭う」之卷

73

第三話

「小田原宿で鯉と観音に伺いを立てる」之卷

165

結尾

「けふは名にあふ箱根八里」

263



弥次

喜多

化か
し道
中

第一話

「多摩の

化け相撲」之卷



その食べ物を通じて食した日のことを、喜多八きたはちは忘れない。

小雪が舞う、夕暮れ時のことだった。

もうあたりは薄暗く、北風に落ち葉が舞っていた。

街道沿いにあるお峯みねばあさんの茶屋から、ふんわかとした湯気が立っていた。

辺りには、なんともうまそうなおいが漂っていた。くんくん、と嗅いでいると、お腹の奥からにゅうと引き絞られるような、胸がほつかりと膨らむような、大変魅惑的なおいだった。

なんだろう。なんだろう。

この美味おいしそうなにおいはなんだろう。

どうやら、床几しょうぎの客が先程からすすっている、あの白くて長くて太いもの、あれのにおいのようなだった。はふはふ、ふうふう、ずるるる……。はふはふ。

なんだろう。そばにしては太すぎる。よく肥えた白いみみずのような。

ごつそさん、と言って旅人は立ち去った。喜多八はたまらず床几に近付いた。前足をかけてのびあがり、どんぶりの中身を覗き込もうとしたら、お峯ばあさんが盆を下げにきた。

おやまあ。ぽん吉。久しぶりじゃないか。

お峯ばあさんは、言った。

また饅頭をねだりにきたのかい？ おまえはまったく、たぬきのくせに、人間さま

と同じものを食べたがるのだから、困ったもんだね。

なんだい？ このどんぶりの中身が気になるのかい？

さすがだね。ぽん吉。

これは上方風のうどんだよ。汁が澄んでいるだろう？ いいかつおぶしが手に入つたのでね。

これでも若い頃は江戸にいて、とある大名屋敷にお勤めをしていてね。お台所のお女中様に教えてもらつたんだ。

おやまあ。そんなによだれを垂らすのでないよ。

もう店じまいの頃合いだし、せつかくだから、おまえにも味見させてやろうかね。

お峯ばあさんは、どんぶりを喜多八の鼻先に置いた。客が残した汁にわずかな麺が浮いている。喜多八はたまらず顔を突っ込んだ。食べた。

夢のように、うまい。

なんだろう、この妙に切ないような香ばしい汁は。めまいがしそう。色もないのにうまみたつぷりの汁が、この、ふにやふにやでもちもちでしこしこの、白い餅を延ばしたみたいなものに染み込んで、尻尾しっぽの毛が逆立つほど、うまい。羽が生えそうなほど、うまい。

喜多八は身を震わせながら、あつというまに食べ尽くした。

おやまあ、目をきらきらさせて。

そんなにおいしかったのかい？

お峯ばあさんは言った。

上方のうどんはそりやあ、うまいが、この世でいちばんうまいのは、お伊勢いせさんのうどんだそうだよ。墨のような汁につかっているが、えも言われぬうまさだそうだよ。

おまえもいつか、食べられるといいねえ。

そう言って笑った、しわしわの指が懐かしい。

看板が風に揺れ、小雪が舞っていた。

だけど、まるで寒くなかった。まるで体中が温かい汁につかる麺になった気分だった。

しんしんと冷える真冬の夕暮れに食べた「お峯ばあさんのうどん」を、喜多八は生涯忘れない。

*

武蔵国の総社である六所宮^{ろくしよぐう}では、夏の訪れとともに祭の季節がやってくる。

毎年五月に行われる例大祭は「くらやみ祭」と呼ばれている。

夜、真つ暗な中を、神様が八基の神輿^{みこし}に乗ってお渡りになる。お先払いの太鼓が打ち鳴らされ、宿場や街道に溢^{あふ}れていた灯りが一斉に消されると、いよいよ神様のお出ました。境内に詰めかけた善男善女は、暗闇の中、息を殺して、神輿に乗った神様が御旅所へとお渡りになるのを見守るというものだ。

人間にとっては神秘の時間。

だが、獣たちにとってそれは、年に一度の、戦の時だった。

『今年はきつねどもに負けてはなんねえべ』

大勢の同胞の前で息巻いているのは、大きな老だぬきだ。

『合戦に勝つて、この一年はたぬきの年であることを見せつけてやんべ』

おう。やんべ、やんべ。

見せつけてやんべ。

たぬきたちが盛り上がるのには理由がある。

毎年「くらやみ祭」の日、多摩のたぬきときつねたちは合戦に挑む。

合戦といつても刀や弓矢は取らない。化け術を競うのである。

化け相撲と呼ばれている。

相撲というが、命がけた。なにせ負けた方は命がない。

生きるか死ぬか、ふたつにひとつなのだ。

『去年はまんまときつねどもにやられたからな。よくよく鍛えるのを怠るなよ。喜多

八。おまえは今年初めて参加するわけだが、おまえの相手は去年、我らが英雄・満七

を倒した、あの凶暴な谷保の鬼ぎつねなのだから』

鎮守の杜もりでの寄合で、師匠からそう言われて、喜多八は『はあ』と小さくうなずい

た。

『でも、まことにあつしでよいのですか。先輩方を差し置いて、こんな大役』

『いや、おまえでなくては駄目なのだ。満七が得意としたろくろ首の化け術を誰よりもうまくこなせるのは、喜多八。おまえなのだからな』

そうだぞ、喜多八。と周りの先輩だぬきから口々に諭された。

『谷保の鬼ぎつねが得意とする、大入道の化け術に勝てるのは、ろくろ首の術しかない。満七は油断をして、とうとう七之宮様の生贄とされてしまったが、おまえならば必ず満七の仇を討ち、たぬき連の勝利のため、働けると信じておるぞ』

『頼むぞ。喜多八』

『おまえならできるぞ。喜多八』

先輩たちに持ち上げられ、喜多八はその気になつて意気揚々、寄合場である熊野神社を後にした。今宵も稽古にいそしむためだ。

鳥居下の階段で待ち受けていたのは、喜多八の幼なじみ・五呂助ごろすけだった。

『よう。五呂助。どうしたんだい？ 寄合場にいなかったが』

喜多八が問いかけると、五呂助はムスリとした顔で振り返る。目つきが悪いのは生まれつきで、いつも片側だけ口がひんまがつている。気性が荒く、喧嘩傷で右耳は割れている。他のたぬきと群れるのを嫌うので、年配者からの覚えもめでたかつたため